

企業名： 日本製鋼所

レポート名：日本製鋼所 統合報告書 2025

【①統合報告書感想レポート】

1. この会社が目指す姿が理解できるか（将来）

日本製鋼所の統合報告書を読むと、この会社が中長期的に目指している将来の姿がしっかりと理解できる。同社は「持続可能な社会を革新する」という理念のもと、「プラスチック資源が循環する社会の実現」「低炭素社会への貢献」「高度な情報化社会への貢献」という3つの大きな目標を設定している。単に利益を追求するだけでなく、事業を通じて社会の課題を解決しながら会社を成長させていく方針がはっきりと示されている。

報告書内の図解を見ると、世の中の変化を出発点として、同社が持つ製造の設備や技術を各事業（鋼材・機械の製造、樹脂をつくる機械など）へどう投入し、結果として社会への貢献と財務的な利益をどう生み出すかが一連の流れとして整理されている。さらに、2033年度に「売上高 5,000 億円規模」という具体的な数字を掲げ、そこから逆算して現在の中期経営計画を立てている。どの事業にお金を集中させ、利益率をどう引き上げるかという道筋が示されているため、会社の将来像が現実的なものとして読み取れる。

2. この会社の競争優位性が理解できるか（現在）

この会社の現在の強みも、報告書から十分に理解できる。その理由は、100 年を超える歴史のなかで蓄積された「鋼などの素材を加工する技術」と、そこから発展した「機械を精密に動かす技術」を組み合わせている点にある。

まず鋼材や大型設備の事業では、発電所向けの巨大な部品や石油精製の圧力容器など、高い安全性と品質が求められる製品で世界トップクラスの実績を持っている。長年にわたって事故なく稼働させてきた実績と顧客からの信頼は、他社が簡単に真似できるものではない。

次に産業用の機械事業では、上記の素材に関する深い知識を機械の設計に応用することで、プラスチックをつくるための大型機械などで世界的な競争力を持っている。素材の特性を知り尽くしているからこそ、その加工に最適な機械を作れるという「素材と機械の両方が分かる企業」としての相乗効果が、同社最大の強みになっている。高い技術力と、世界中の顧客の要望にすぐ応えられる体制の双方が、現在の優位性を支えていると判断できる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか（変化）

同社の強みには持続性があると判断できる。なぜなら、今の優れた技術に満足するだけでなく、時代の変化に合わせて自社の技術を新しくしていく姿勢が示されているからである。

たとえば、世界的に環境への配慮が求められる中、同社は主力である機械事業において、環境に優しい素材の加工技術や、一度使ったプラスチックを再利用するための機械の開発を進めている。環境規制が厳しくなることを自社の成長のチャンスと捉えており、事業が長く持続していく裏付けになっている。

また、今後の情報化社会に向けて、電子部品分野での研究開発を加速させている点も評価できる。次世代の半導体向けの新しい素材や、精密な製造装置など、これまでの事業の枠を超えた新しい領域への展開が進んでいる。外部の企業や大学と連携したり、研究開発の拠点を新しく整備したりと、新しい知識を取り入れ続ける仕組みがあるため、時代の変化にも十分に対応していける会社であると推察される。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

達成できると思う。報告書から、会社が成長し続けるためには社員一人ひとりの成長が欠かせないという考えが根付いていることがわかる。中期経営計画の中でも多様な人材の活躍を重要視しており、とくに「失敗を成長の糧とする」といった、社員の挑戦を後押しする制度や社風が強調されている。研修制度などのサポート体制が整っていることも読み取れる。大きな製造業というと、上司の指示にただ従うだけの保守的なイメージがあったが、この会社では自ら手を挙げて学ぶ意欲を大切にしていることが伝わってきた。こうした環境であれば、若いうちから自分の意見を持ち、現場の高い技術に触れながら仕事を進めることができる。与えられた作業をこなすだけでなく、周りの人を巻き込んでプロジェクトを動かすような経験が積めるため、社会人としての能力を大きく伸ばすことができると判断できる。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

この報告書の良かった点は、長期的な目標から中期経営計画、そして各事業の具体的な取り組みまでが一つのつながりとして分かりやすく書かれている点である。特に「価値創造の軌跡」というページでは、創業時から現在に至る技術の歴史が、その時代の社会の要望とどう結びついてきたかが整理されており、会社の存在意義がすんなりと理解できた。財務の数字の推移もグラフなどで視覚的に見やすく、経営の透明性が高いと評価できる。

一方で、より良い報告書にするための提案としては2つのポイントが挙げられる。

1つ目は、会社にダメージを与えるかもしれない危険性への備えについてである。海外との取引が多い企業であるため、国際情勢の悪化や材料費の高騰、為替の急激な変動といったトラブルに対して、会社としてどう対策していくのか（調達先をどう分散させるかなど）をもう少し詳しく記載すると、経営の安定感がさらに伝わると考える。

2つ目は、作っている製品が私たちの生活にどう役立っているのかという具体例が少ない点である。それぞれの機械の専門的な説明は詳しいが、その機械で作られたものが最終的に自動車やスマートフォン、医療機器など、どんな身近な製品に使われているのかを紹介するページがあれば良かったと感じる。そうした具体例があれば、この会社が社会にどれくらい貢

献しているかが、学生や一般の読者にもより直感的に伝わる内容になると考える。

引用 日本製鋼所 統合報告書

[https://jsw-web-s3.s3-ap-northeast-](https://jsw-web-s3.s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/ja/ir/library/integrated/integrated2025_View.pdf)

[1.amazonaws.com/ja/ir/library/integrated/integrated2025_View.pdf](https://jsw-web-s3.s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/ja/ir/library/integrated/integrated2025_View.pdf)